

# E-5 老後、老人問題研究(3) 同居老人の生活と孫の老後意識

産思島女短大 日松浦純 今村節子 古川栗子

目的 日本の大多数の老人(約75%弱)は、誰れかと、同居することによって、老後を済ましていくと報告されている。そしてこの傾向は、将来においても、急激には、減少しない。日本獨特である指摘されている。社会保障の不備と私的な家族扶養を有代りとするという指摘を受ける。しかし、この状況は、現在の若い世代にも及ぶのか否かは検討を要すると思われる。そこで、この報告では、若い世代の老後意識の形成において、お母さんの老人との同居経験の有無が、どのように影響を及ぼすのかの検討をするのである。その際、現在老人と同居している場合、老人の、同居している家族内における地位、役割、その同居は、三世代家族として一貫しているのか、一時的別居の、いわゆる修正直系家族形態と、現在の三世代家族として存在しているのかの検討も含め、検討する。

方法 勤務短大(県庁所在地人口50万弱の都市における2000名の女子学生数)における学生(年齢18才-20才)600名を対象にアンケート調査、時期昭和54年6月

結果 若い世代の老後意識の特徴は、以下のとおりである。老人との同居経験有無は老人に対する理解、特に、お母さんへの理解と深い関係にある。同居経験有無に関係なく、お母さんの老後の生活、特に、経済的扶養、身体的扶養、精神的扶養の点については、私的扶養、特に、子と母による扶養に、期待している。